

執筆：小島 伊織

スパルタ病理塾

あなたの臨床を変える！病理標本の読み方

書評者：志水太郎(獨協医科大学教授・総合診療医学)

本書は全ての医学生・若手臨床医にとって病理診断のロードマップを示してくれる重要な一冊です。診断にかかわる臨床家の私達としては、病理診断の技術や考え方は専門家に頼りきりではなく自らも理解する努力を払う必要があります。本書は、その学習のわかりやすい手順を与えてくれます。評者は個人的に、「病理診断はフィジカル診断の一環」くらいの距離感で、親近感を持っています(その意味では本書は《ジェネラリスト BOOKS》シリーズでもよいのかとも思います)。なぜなら、フィジカルでは血管を直視できるのは眼底と爪くらいですが、病理の場合は全て直視、つまり病理は究極の視診ともいえるでしょう。フィジカルの延長という理解で行けば、「病理診断」のとっつきにくい(?)印象が少しでも払拭されるのではないのでしょうか。

個人的には愛媛大学在学時の基礎配属が病理学(第二病理学)だったために、病理(特に腎)にはとても親近感を持っていますが、そのような曝露でもないと、病理の魅力に行きつくまでには心理的距離があるかもしれません。本書はそ

のような距離をぐっとゼロに近づけてくれます。その理由は、おそらく本書の心臓となる第1章の病理総論の整理の表(p.9)に示されるように、病理組織の見方、考え方のbig pictureが示されていること、異常のパラメータをベクトル図で示したもの(p.12)をはじめとして、病理を理解するための視覚化が明快に行われていることだと思います。それに続く章では、弱拡大・強拡大のレンジを使い分けることで全体を見ることの重要性、さらに、組織を傷害する病態の代表的な分類である腫瘍・炎症で切り分けた病理の見方、また特殊染色・免疫染色の理解についての章というわかりやすい展開になっています。

本書の著者・小島伊織先生は中部地方の総合診療教育で有名な大同病院の病理の先生だけあり、総合診療的な視点にあふれていることも本書の特徴です。目の前の病理像を通して臨床像のコンテキストを考える大切さが各章にちりばめられ、病理を通してdirect patient careを見据える視点などの本質的なメッセージも満載です。また、病理を読むことに加えて、

最終章の病理プレゼンのエッセンスや、付録の「補習室病理診断依頼時の心得」から医師間コミュニケーション上で必要な病理の考え方を身につけることができ、とても参考になります(そして、それは臨床力に直結します)。さらに、もう一つの付録「本書を読み終えて次のステップに進む本」では各章の次のステップを示してくれるリファレンスが付いていて、本書が病理診断学習の土台を担うロードマップの一冊目になり得ることを実感させてくれます。

このように、本書はこれまでにない新鮮で独自性の高い病理学習に役立つ一冊です。医学生が読んでも(難しいところもあるかもしれませんが)、病理を身近に感じられるようになる素晴らしい出会いが、この本を開くと待っているでしょう。幅広い読者層にお薦めです。

● A5・頁206 2020年2月
定価：本体3,600円+税
[ISBN978-4-260-04130-0]
医学書院刊